

(3. 共同研究班活動報告)

3-1. コミュニケーションと自己アイデンティティ

江見 克基・北川 茉里奈

研究会開催概要

2018年12月1日(土) 14:00~17:00 関西学院大学
上ヶ原キャンパス H号館 305号室

1 趣旨

「自分とは何か」という問いに、現代を生きる我々一人ひとりが向き合って生きていかざるをえない。就職活動における「自己分析」や、自己啓発本、「生きがい」や「自分らしさ」といった言葉の蔓延はそうした現状を示しているといえよう。こうした傾向が、部分的には雇用の流動化などに象徴される社会の不確実性の高まりと連動しているという考える向きもある。つまりその傾向は、自分を位置づける確固として安定した枠組みが崩壊した今、我々一人ひとりがすべての選択を「自己責任」によって処理しなくてはならないということを示しているといえるだろう。他方で親密な他者との関係性もこれまでのように「本当の自己」を曝け出すことのできる安住の地という側面が失われているようにも感じられる。友人関係が、お互いに相手に配慮し、いわば「空気をよむ」ものであるとすれば、そこで呈示する自己は演技じみた「嘘くさい」ものとして自覚されるのではないか。あるいは一方で、コミュニケーション技術の目まぐるしい発展のなかで、我々はこれまで決して見知ることがなかった、生活圏の異なる他者と、自分の深奥にあるもっともプライベートな情報ですら共有することができる。このようにどの関係を前にした自分が「本当の自分」なのか分からないといった、これまでには考えられない状況が可能になったのが、今日我々をとりまく親密性であるといえる。

実際、このような社会や人間関係の変容と、自己アイデンティティの不安定化を結びつけて捉える社会学的な記述にはさまざまなものがある。たとえば、ギデンズであれば「再帰的近代化」というキーワードでそれを論じているし、バウマンにおいては「リキッド化」がそれに対応する。しかしながら周知のとおり、前者はそうした変化をポジティブに捉えているのに対して、後者はネガティブに捉えている。このように社会学の立場にもさまざまなバリエーションがある。こうしたなかで、本研究班は『不安定な自己の社会学——個人化のゆくえ』（片桐2017）で、より包括的な視点からその変化を記述した片桐雅隆氏に注目した。片桐氏はとくに「心理化」をキーワードにそうした分析を行っているが、その際のパースペクティブである「認知社会学」それ自体も（社会学は）自己と社会をどう捉えるべきであるかというより根源的な考察を含んでいる。

2 事前勉強会

ここで研究会当日までの流れを振り返る。まず、本研究班のメンバーで『不安定な自己の社会学』の読解を進めた。また片桐氏の2000年以降の著作も必要に応じて参照した。

まず問題にあがったのは、「認知社会学」という著者の立場をめぐる論点であった。ごく簡潔に述べれば、「認知社会学」はある集合体のカテゴリーであるという認知（カテゴリー化）によって自己や他者が意味づけられ、さらにそれをもとに相互行為（における振る舞い方の規範）が形成され、そうした延長に集合体も構築されるという考え方である。『認知社会学の構想——カテゴリー・自己・社会』で述べられているように、「自己と社会は相互に独立したものである」としてあるのではなく、「それらはカテゴリー化の作用によって同時的に生み出されるのである」（片桐2006:14）。そこで『不安定な自己の社会学』において片桐氏は、「カテゴリー化」の変化の過程を描くことで社会の変化を説明すること、そして「社会が不安定化している」といわれている現状を再検討することを試みている。

しかしながら我々の疑問は、『認知社会学の構想』において理論的に整備された「認知社会学」の可能性は、『不安定な自己の社会学』でとられている方法のように学説史的なアプローチにとどまるものなのだろうかという点だ。こうした疑問が生じた背景としては、学説史的なアプローチでは「カテゴリー化」の変化をなぞることはできたとしても、『認知社会学』で取り上げられていた相互行為の水準が構造的に議論されにくいということがある。そのため『不安定な自己の社会学』は、時代に特徴的な自己についてのカテゴリーと、それによって構築される集合体＝社会のあり方の結びつきが単純に対応しているかのように論じているかのごとく読めてしまう。

このように事前の勉強会では、①カテゴリー化が適用される実際の相互行為の場面をどのように捉えるか、②学説史的ではない方法で認知社会学をさらに具体的な事例の分析に応用できるのかという2点が問題としてあげられた。

3 当日の流れ

研究会は「社会学は〈わたし〉の不安定さをどう捉えるか」と銘打って、本学上ヶ原キャンパスのH号館305号教室にて12月1日（土）14時から行われた。本研究班の院生メンバーの他にも学部生や研究員ら計7名が参加した。研究会は、片桐氏による講演と、その後の質疑応答の二部構成で行われた。

3.1 講演

『不安定な自己の社会学』のうち、まず「心理化」の現代的展開に該当する点を、本書を手にとったことのないかたでもわかりやすいように片桐氏の経験などを交えて講演をいただい

た。そこでは現代的な心理化を「管理的な心理化」、「自己実現の心理化」、「人間関係の感情意識化」の三つの特徴を持つものであることを確認したうえで、それが欧米社会で時代的にどのような変遷を経てきたのかが説明された。続いて、戦後日本における個人化について説明がされた。そこでは欧米社会と共通の「心理化」の諸要素が時期的に圧縮された形で展開されていることが指摘された。

3.2 質疑応答

質疑応答では参加者の多くから質問があったが、ここでは事前勉強会で提示した問題点に加え、さらに興味深かった点を取り上げたい。

①カテゴリー化が適用される実際の相互行為の場面をどのように捉えるか。

片桐氏によれば、認知社会学においても相互行為の場におけるカテゴリー化は文脈依存的であり、その出所の一つにはシュッツの「レリバンス」概念があげられるとしている。つまり、相互行為の文脈に応じてどのようなカテゴリー化がレリバントであるかが変わってくるということだ。しかし、『不安定な自己の社会学』における焦点は「カテゴリー化」の変遷であった。こうした「カテゴリー化」の議論と相互行為の具体的な状況とを関連付けていくかは「認知社会学」の更なる展開の方向性として考えられる。

②学説史的ではない方法で認知社会学をさらに具体的な事例の分析に応用できるのか。

まず片桐氏によれば、「認知社会学」の展開として学説史的方法を採用したのには、自身のこれまでの研究スタイルと合致するところがあったからだという。それゆえに「よくわかるが、どのように応用するか」という問いは、片桐氏がつねに投げかけられてきた問いであったようだ。そこで、応用の方法の一つとして片桐氏は、「オタク」などの時代に典型的な人間類型（あるいは社会的性格）の分析によって、具体的な相互行為もみることができるのではないかと提案した。

さらに、認知社会学の立場と「社会の消失」論との距離について追求する議論も展開された。片桐氏は自身の構想の背景として、「社会が不安定化している」と言われる状況に対して必ずしもネガティブな評価を下しているわけではないという。例えば「心理化」という現象は、ある問題を（社会ではなく）心や精神に帰属させて語るという方法であり、確かにその意味で社会のリアリティを希薄にするものではある。しかしながら、そうした語り方自体が社会の成員に広く共有されているのだとしたら、そのかぎりでは社会は安定しているともいえる。この意味で、片桐氏の捉え方は「社会」がなくなるというのではなく、「社会的なもの」がなくなるという考え方に近いという。

4 おわりに

研究会を通じて、相互行為の具体的な状況をめぐる議論が「認知社会学」の展開における次なる課題となるという点と、そのための方法の一つとして時代に典型的な人間類型の分析が考

えられるという片桐氏の認識が明らかになった。こうした分析を現代社会において例えば「コミュ障（コミュニケーション障害）」といったものが挙げられると我々は考えた。「コミュ障」という言葉は、精神医学的な語彙が流用された形で日常的に用いられている例であり、また「KY（空気を読む）」などのように人間関係において適切に振る舞うことの難しさを指し示していると考えられる。それは片桐氏のいう「管理的な心理化」と「人間関係の感情意識化」を同時に示しているといえるが、具体的にどのような状況で「コミュ障」が用いられ、その帰結が何を意味するかを理解することでカテゴリー化の議論と相互行為の議論が接続可能になるだろう。

最後に、片桐氏が本題とは異なる文脈で発言した言葉に触れておきたい。曰く、社会や自己の不安定化という点に片桐氏が関心を抱いたのは、自分がまだ「社会的なものがあるなかで自分を位置づけてきた時代に生まれ、そのような経験をしてきた」からであり、「もし、そうした前提をおかないとすれば心理化や個人化といった現象もまた違ったように論じられるかもしれない」という。現代社会で自己のあり方に関心をもち、それを分析したり評価したりする営み自体が時代に即したものであるならば、今後それが変化することも十分に考え得るものである。たとえば我々が今日どこか問題視してしまうインターネットを介した短期的な人間関係も、いつかは人々にとって当たり前のものとなり、我々が問うに足りないものになるのかもしれない。そのとき、社会学における自己アイデンティティという分野はどのように変わらざるをえないのか。不安定な自己と社会のゆくえを問う我々は、みずからの認識の足場をこそ問題にしなければならないのかもしれない。

【参考文献】

- 片桐雅隆, 2006, 『認知社会学の構想——カテゴリー・自己・社会』世界思想社。
———, 2017, 『不安定な自己の社会学——個人化のゆくえ』ミネルヴァ書房。